
他人の色恋

Zン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他人の色恋

【コード】

N9870G

【作者名】

Zン

【あらすじ】

中学生時代に友人関係に残した疑問が、六年の歳月を経て解消されるお話です。

(前書き)

初めて書いた小説です。

拙い文章でごめんなさい。

ジャンルは迷った末恋愛にさせていただきました。

思い出の中に見る季節は、今自分が体験している物よりも素晴らしく感じる。

これは、日没が遅く、気温が高まるのを、誰もが感じる季節の話だ。

期末試験の終わった学生なら、夏休みのおかげで少しは景気の良い気持ちで生活してるだろう。少なくとも、俺は今でもそう思っているのだが、この時の直也は違っていた。

最近ずっと、こうなのだ。

「あのさ、なんかあったの？」

思い切って聞いてみることにした。返事はなかなか返ってこない。とりあえず見つめるようにして返答を待つ。

ようやくアクションが返ってきたと思うと「え……、何……？」となかなか目を合わせない。

「何って、最近様子おかしいじゃん？お前。妙に元気無しし」

「ああ、うん、まあ……」

どうも歯切れが悪い。正直イライラしてきていた。

普段は自信家で、ちよっと偉そうなくらいの人間がこうもガラリと変わる理由はなんだろう？

判断材料を増やす為にも、追い討ちをかけることにした。

「気のせいか最近、紗代のことも避けてないか？」

紗代は俺と直也、共通の女友達で、三人とも小学校からの付き合いだった。

中学に上がってから三人で登下校することがよくあったが、今はそうじゃない。

そのせいか俺も、なんとなく紗代に声がかげづらかった。

前のように三人で楽しく遊べたら良いのだが、という思いは強か

った。

「あいつもなんか気まずそうだしさ」言い終わる前に直也が喋った。「付き合ってた彼女に振られた。っていうか、別れた」

何かを振り切るように一気に喋りきった。

意外だった。誰かと付き合っていること自体初耳だったし、想像もつかなかった。

ほぼ毎日と言って良いくらい俺と直也は顔を合わせているので、一体いつ彼女とデートとかしてるんだ？という疑問が浮かんだが、恐らく照れもあったのだと思うことでその疑問をどこか頭の隅に流した。

「へー、知らなかったな。なんだよ、言ってくれてもよかったじゃん」

何の気無しに言った。どうせ相手も、俺の知らない女子だろうと思っただ。

なにせ俺は女友達がそう多くなかった。

運動は苦手なくせに友達は運動部の奴が大半だったし、だからこそ、

中学2年の俺はこの事に対する洞察力とかが抜けていたんだろう。いや、今でもかもしれなかった。

直也は確か「ああ、まあな。悪かったよ……」とか言って流していた気がする。

とにかくこの時はそのままゲームの話とかに雪崩れ込んで、この話は終わってしまった。

結局、俺は紗代と以前のように接するようになったが、紗代と直也はそれ以後もよそよそしいままだった。

特に直也は極端で、毛嫌いしてるのかというくらい係らないように振舞っていた。

俺には「直也と付き合っていた相手は誰なんだろう」という疑問だけが残った。

だが、振った相手を傷心の友人にわざわざ聞くほどむごいことはな

いと自分に言い聞かせ、忘れることにした。

それから六年くらい経って、俺は他県の大学への進学を機に1人暮らしを始めていた。

そして大学二年目の冬、実家に帰ることにした。冬季休暇は短いので、前の年は春まで戻らなかったのだが、

この年の夏はアルバイトやらで戻れなかった（厳密には、面倒になって戻らなかった）のを親に責められたからだ。

いざ戻ると、食事は親が支度してくれるし、こたつはあるしで実家も悪くないと思える。

そういう実感が湧いてきた頃、携帯電話が流行らないJ・POPでメールの着信を告げた。紗代からだった。

「帰ってきてるんでしょ？おばさんに聞いた。うち来て飲まない？」と書いてあった。

軽い夕食も食べ終わって、丁度暇を持て余していた時だったので、ありがたかった。

よしてきた、と行く旨を返信し、取り合えず実家にある中で持っていけそうな酒を見繕っていくことにした。

紗代の家までは自転車でも五分くらいかかる。雪こそ降っていないが、冬の夜はやはり冷える。

かじかむ手でインターホンを押すと、中から紗代が出てきた。会うのは一年半ぶりくらいだった。

久しぶりに見る紗代は女性的で柔らかかな印象で、中学生くらいの頃の勝気な少女はすっかり影を潜めていた。

おばさんとおじさんに簡単な挨拶と一緒に土産を渡してから、こたつ付きの座敷に移動する。

紗代の家はとも広かった。

座敷に入ると、紗代の弟の太一がこたつから生えるように横になってテレビを見ていた。まるでヤドカリだ。

俺達に気付かないヤドカリ少年に、紗代が「太一、俊司が来たよ」と見下ろして言った。

途端、わー久しぶり！お土産は？と中学一年生が目を輝かせた。おばさんに渡したよ、と言うと走って出て行った。

「さて、飲もうか」

紗代がテレビのチャンネルを太一の見ていたチャンネルから変えて、音量を少し下げた。

缶チューハイで乾杯して、大学はどうかの近況報告で盛り上がった。

と言っても、紗代は地元の大学に進学してしまつて新鮮味も無いよつで、殆ど俺が説明されていたような気もするが。

しばらくすると太一が戻ってきて「姉ちゃん！なんでチャンネル変えるんだよ！」とか怒鳴つたので、

紗代がうつとうしそうにリモコンを渡して「好きなの見な」と言つた。

太一は再びヤドカリになつてテレビに熱中し、俺達は再び酒を飲み始めた。

二本目の日本酒の瓶を開けてしばらくしてから、紗代が何気なく聞いてきた。

「今、彼女居るの？」

「いないね。そっちは？」返答次第では誰か紹介してよ、とでも言うつもりだった。

「ないない。大学入つてからはこれといつてねえ……」

紗代がふるふると首を振つたところで「あ……」声が漏れた。何故か、直也のことを思い出した。

「何、どうかした？」

「いや、なんでもないよ」かぶりを振る。

「何よ、気になるじゃん」

思わせぶりの反応をされれば、そりゃ誰だつてそうなるだろう。

ただ、二度と仲良くすることのなかった直也の話を当人にするのは

少し気が引けた。

「気になるからさ、言っちゃえよ」とか言ってる。既に顔が赤い。多分俺も赤かっただろう。

「じゃあ聞くけどさ、直也のこと、覚えてる？」

この時、少しだけ間があつたように思えたが、それは気のせいかもしれない。なかった。

「あー、そりゃ覚えてるよ。引越しちゃったんだつたね」

「うん。中三の夏にね」

そういえば俺も長い間直也とはメールでしか話していないと思った。

「それで、直也が何？」踵を返すような言い方だった。

余計な事を聞くんじゃないよと言われてる気分になったが、この時話そうとしているのはまさにそれだった。

この時話してしまつたのは、きつと胸の中にしこりのように疑問が残っていたからだろう。

「ほら、ある時期を境にお前ら全然話さなくなつたつていうか、よそよそしくなつたじゃん？」

紗代は無表情になっていた。思わず顔がうつむいた。視線をテレビに寄せると、太一が寝こけている。

「あれつて何だつたのかなつて思つて……いや、ごめん」

「なんでごめん？」

顔をあげると、「それが何？」という顔をしている。よかつた、大したことじゃないらしい。

「あー、いいや。それで、あれつて何だつたの？」

「あれね。私達付き合つてたんだけどさ、色々とうまくいかなくなつちやつて……」

ちよつと待て、誰と誰が付き合つてただつて？アルコールが回つた上にこたつで温まつた俺の頭は、予想外の答えにオーバーヒートを起こしそうになっていた。

「ちよつと待つて。俺、そんなこと初めて聞いた」

「やつぱり知らなかつたの？ごめん。てつきり直也が言つてると思

つてた……」

両手の顔の前で合わせる。わざとらしいから止めてほしいな、それ。

「いや、いいよ。俺に謝ることじゃない」

この時、俺の中で頭の隅に流した疑問と、目の前の証言がはじめて合致した。

テストの答えが分からないまま、回答を見せてもらったような気分だった。

何のことはなかった、デートは何度もしていた。俺というオマケが大多数について回っていただけで。

普通そういう状況に置かれたら気付きそうなものだが、俺はそれほどに鈍感だったらしい。

よくよく考えれば、誰かに振られたことと、直也が紗代を避けていた事には関連性が無い。

だが、二人が付き合っていたら、全てのことに合点がいった。

直也が何故付き合ってる相手が居る事、紗代と付き合っている事を言わなかったかの理由も大体想像がつく。

異常な自信家であると同時に、直也は秘密主義者のようなところがあった。更に後に紗代から聞いた話では、

二人は一度だけ肉体関係を持ったらしい。結局この時の直也が一方的に求めるといった食い違いが亀裂を生んだようだった。

もしかしたら直也は俺のことをどこかで邪魔に思っていたのかもしれない、隠し続けることに罪悪感を持っていたかもしれないし、何一つ気付かない俺を嘲笑っていたかもしれない。

だが、これだけ分かりやすい状況で気付かなかった俺も俺なのだ。なんて下らないんだと思うと同時に、思わず嘔き出してしまった。

紗代は不思議そうな顔をして、太一は何事かと目を覚ました。

この笑いが乾いてから話すことにした。

俺はとんでもない鈍感で、神経質だと再認識させられた。

実際この後、紗代に鈍感ねえ、とこぼされるのだが、

だから俺はまだ童貞なんだと思って、コップの酒を飲み干したの
だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870g/>

他人の色恋

2010年10月12日00時09分発行